

Not my intention 【改訂版】

()

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「囹役はもちろん私以外が行く。私は飛雷神で帰る。……え、やっぱりダメ？」

原作知識のある転生主人公（女）

別に卑劣ではないが聖人でもない。ちなみにエクソシストでもない。あと飛雷神も使えない。

イノセンスが弱すぎて話にならないんですがそれは状態な彼女でも魔術は使えるが、弱いものは弱い。

主人公は原作に巻き込まれることなく逃げ切れるのか？ 死なずにいられるのか？ 乞うご期待！

※この小説は改訂版となります。

目次

逃走の果てに	1
安寧は遠く	7

逃走の果てに

走る、疾る、趨る。

どこまでもしなやかに、ただひたすら逃げるためだけに進む。

肩までの金色の髪を靡かせて、ミニスカートだということも気にせず走り続ける。

「しつこいな……よつとー」

苛立ち紛れの叫びと共に、少女は滑らせるようにナイフを投げた。だが、それは微かな金属音と共に弾かれたようだ。予想通りの手応えの無さに少女は歯噛みし、木々の間を縫うように駆け抜け続ける。

後ろから迫りつつある異形の怪物から少しでも距離をとるため森の奥へと躊躇わずに行く様は、さながら猫のようだった。

焦りを感じさせる歪んだ表情。頬を伝う汗を拭う時間すら、少女には与えられていないのだ。

暗澹たる空気を醸し出している森の中央部に少女は辿り着く。眼前には泉が広がっており、これ以上逃げることは不可能だった。

立ち止まり額に手を当て、あちゃーと唸る少女に下卑た笑いが浴びせられる。

「諦めろ、裏切り者のエクソシスト！ お前はネズミ、もう終わりイ！」

「……袋のネズミってことかな？ 舐めてくれるよ、全く」

少しの絶望も感じさせないが、少しの自信も感じさせない声が囁かれる。

だが、それはどう考えてもその言葉はこの場に似つかわしくないものだ。普通の人間ならば、恐怖にうち震えている筈なのだから。

異形の怪物——AKUMAは腐り果てたリングの頭を傾げる。

レベル2のアクマである彼にも、僅かながらも確かに思考能力が存在していた。

「お前、なんで戦わない？ エクソシストなのに戦わない？」

「ハハハ。残念だがハズレだ。」

申し訳ないけど、私はエクソシストじゃないよ」

大袈裟な身振りで肩を竦め、苦笑いを浮かべる少女。

それが癩に触ったようだ。馬鹿にされたと勘違いをしたレベル2のアクマは、機械で出来ている手を強く握りしめた。

リングの頭部に付属する狼のような口がおどろおどろしい唸り声を響かせる。地の底に潜む怨霊の如きそれは少女にも届いたようで、桜色の唇を引き攣らせ、乾いた笑いを溢した。

「えっと……ごめん、怒っちゃった？」

「ぶっ殺す!!」

なけなしの知性すらも投げ捨てて、頭に対して不釣り合いな大きな機械の足で大きく跳躍する。

瞬時にして少女の前に辿り着いたアクマは、雄叫びと共に機械の腕を降り下ろした。

「ぎゃあっ！ 危ないなあ！」

尻尾を踏まれた猫のような悲鳴を上げ、少女は横に転がることでそれを回避した。

しかし無駄口を叩けるくらいには余裕があるようで、立ち上がりながらシャツに付いた埃や砂をはたき落としていた。淡くも苦さを乗せた瞳は、森に向けたまま。

避けられるとは思っていなかったアクマは呆然と少女を見つめ、腕をつき出した体勢のまま固まった。

当然だろう。これまで一切の反撃を見せなかった少女が余裕綽々の動きをしたならば、レベル2程度の脳では理解しがたい。加虐者にしかなり得ない筈のアクマには、あり得ざる光景だったのだ。

少女は刺すような視線に漸く気づいたらしく、困ったように眉尻を下げて微笑んだ。

「悪いね。エクソシストじゃないから私は弱いんだ」

でも、と尚も少女は続ける。

月光に照らされる少女は、艶やかさと爛漫さを兼ね備えていた。

暖かな微笑みは消え、自身に敵意を向けるアクマを睨み付ける。

嫌悪を、憎悪を、侮蔑を、憤怒を、憐憫を、羨望を、愛情を。

どこかズレた感情も何もかもをごちゃ混ぜに、全てをアクマにさら

け出す。おおよそ言葉に言い表せられないような気持ちもない交ぜにして。

「戦えない、わけでもないんだよ」

空気を震わせてアクマに伝わるのは、明確な殺意。

暫しの間を呆けたように黙っていたアクマも、すぐに獰猛な笑みを湛えた。

「そうだ、殺す殺せ殺しあおう！ 俺たちアクマは兵器だからな！」

命を奪う快樂、存在意義の全う。それらに対する歡喜を抑えることなく、高らかに宣する。

木の幹のような胴体から伸びている腕の筋肉を隆起させる。機械の筋が蠢くと言うのは、不気味さと滑稽さを感じさせた。

それらすら少女は意に介した様子もなく、右手の指を二本立て厳かに何かを唱え始めた。

「導式・オン・アバタ・ウラ・マサラカト・m」

それは、古より存在する魔の言の葉。数少ない導士だけに伝えられし奇跡の技。

本来ならばこのような少女が使って良いような代物ではない。アクマは驚駭を隠すことなく口を大きく開けた。

「なっ!? お前、導士なのか……っ！」

「レベル2なのに博識ね。でもって導式解印オン・ガタルつと」

ひゆう、と囃すように口笛を吹き、術式を完成させる。

少女の右隣から地響きを奏で、漆黒の棺が現れる。何も存在しないところから突如発現したそれに、アクマは身を引いて警戒を顕にする。腐臭を放つ口からは犬歯が覗き、濃厚な殺意をちらつかせた。

「伯爵様が言っていた。

悪魔の女だ。最悪の女だ。矮小な塵芥だが、お前ほど面倒な奴もないとな」

「君達にとつての害悪になれるなら、イノセンス保持者冥利に尽きるよ」

アクマからの凄まじい殺意すら何処吹く風。少女は髪をかきあげながら、棺を指で弾く。

「忌々しい存在、恥辱を収束したがようなお前！ ルート・ミツシユリンク！」

「む、伯爵さんは名まで覚えててくれたのね。そりやますます光栄だよ」

少女——ルートは視線を一度アクマに向け棺にこれでもかと巻き付けている金色の鎖を掴む。ただそれだけの動作で、鎖は独りでに外れた。

己が手足の如く自由に鎖を解くルートは、アクマという脅威すら恐れていないかのように悠然と術を行使する。

先程までの自信を感じない声色とは違う。最早ルートに焦燥は僅かにもなく、えもいわれぬ確信のようなものを見せていた。

棺の蓋を軽く撫で、開き始める棺から何かを取り出す。暗闇と蓋のせいで目視できず、アクマは無言で身を沈め攻撃体勢に入る。

「さて、それじゃあ」

薄く微笑み、手に握りしめている筒状の物体を弄る。かちやかちやと安物の玩具のような音を発てるそれに、異形の怪物は低い唸りを返す。

緩慢な動きで棺の蓋が閉まり、地響きを発てて消えていく。それは始まりの合図でもあった。

人のいない黒い夜の森で、今戦いの火蓋が切って落とされる。

「始めようか……なーんてね」

筈、なのだが。

「そんな暇はない。おさらばだ！」

ピインと高い金属音と共に、少女が筒状の何か——発煙弾を横風ぎに放り投げた。

一瞬にして辺り一帯を白煙が包む。

予想外の攻撃にアクマは面食らう。その隙を逃さないと言わんばかりに、少女が煙の中を欠片も迷わずに駆け抜けた。その素早さはレベル3もかくやというもので、アクマは仰天する。

このために、片時も森から目を離さなかつたのか。煙で見えない足場を覚え、道へと迷わず進むために。

アクマは驚きの渦中にいながらも、少女の不可解な動きの理由を理解する。

考えを巡らせる暇はないとハツとするが時既に遅し。慌てて煙の空間から脱出し、少女が駆けた方向へと目を向ける。

ぎよろりと蠢き、闇にて少女を捕捉する。当然ながら全身全霊をかけて逃げた彼女の姿は豆粒程度で、窮追不可能なのは明白であった。要するに。まんまと少女に逃げられたと言うことになる。

「あアんの糞アマがああああああ!!」

静かな森に、アクマの怒りの咆哮が虚しく劈いた。

「危ない危ない。レベル2だって分かってたら、チョツカイはかけなかったのに」

レベル1かと思ってたらまさかのレベル2なんだもの、流石にたまげた。脳足りんなのか何なのか、動きが鈍間でレベル1のように見えただから挑発したけど、失敗した。

おかげでこんな森でアクマとランデヴー。もう二度としたくないものだ。願わくば、次に出会うアクマはレベル1でありますように。時々アクマを殺さないで私も困るからね。咎落ちとか、シヤレにならないし。

まあ、一応レベル2でも殺せるには殺せるのだが、いかんせん苦戦してしまうので長引く。この程度の浅い森じゃ一般人にも丸見えで、目撃者が出る可能性もある。それは私としても不都合なのだ。

森を進み続けていれば漸く出口が見える。微かな明かりすら、今は頼もしく感じた。だけど、これから先の事を思うとため息を吐かずにはいられない。

まさか引越して三日でアクマに襲われるとは。まだこの街に来てばかりなのに、もう引越さなくてはいけない。

本当、アイツらは私の邪魔ばかりしてくれる。苛立ちで目眩がし

てくるほど。我ながら酷い厄寄せ体質なのだが、こればかりはどうしようもない。

木々のアーチを潜れば、石が敷き詰められた固い地面を足裏に感じる。もう少し行けば街に着く。まだ油断はできないし、このまま走ろう。

息を吐く間もなく私は再び駆け出す。疲労で足が笑っているが、死にたくはないから進むしかなかった。

人の命が簡単に消される世界観の漫画、「D. Grayman」。
そんな漫画の世界に転生したと気づいたのは、色々ともう手遅れな時だった。

私には、ルート・ミツシユリンクには、最早選択肢は限られたものしかなかったのだから。

安寧は遠く

私は所謂転生者である、まる。

……もつと語ることがあるだろう、とは思わなくもない。しかしぶつちやけこの一言ですべて片付く話なのだから仕方ない。

この世界がD・Graymanとかいう創作物の世界であろうと、原作知識があらうと、ストーリーに関わらないと大して意味がないんだから。

いや、まあ。私はイノセンス保持者であるし、完全に関わらないというのは不可能でしょうけども。夢は大きく持っておきたいのである。

「寒いなあ……」

小さな安アパートで、温かい紅茶を啜りながら一人呟く。もう12月だからか、時たま雪が降ることもある。温暖な日本の記憶はもうあまり無いが、ドイツと比べるまでもなく暖かかった。

ちなみに紅茶の茶葉はダーズリン。ベターだけど、癖もなく好ましい味なので愛飲している。

ストレートでも美味には変わりないが、特に好きな飲み方はロイヤルミルクティーにして飲むもの。今日は疲れているから、普通に淹れて砂糖を一杯入れたただけだけでも。

こうして嗜好品を楽しむ余裕が出来たのも、あの人のお陰だろう。私を助けてくれた人。私を導いてくれた人。

性根から破綻した非人間ではあるが、その内に歪みはない、と思いたい。

正しくはないけれど、悪人ではあるけれど……まあ、様々な点で優れた男だ。

天の邪鬼のような奇妙極まりない彼だが、一応、恩人には変わりない。感謝の気持ちだけは確かだ。せめて恩だけでも返さなくては。

……いや、死んでたら死んでたでまあ良いが。

そう、あんな腐れ外道神父は死んだ方が良いんじゃないかと思うほどには、非道い人である。

悪いところばかりではないが、金を貸してくれている相手に対して脅しを入れたり酒瓶を投げつけたり——飲み終わった空っぽのものとする辺り流石だと思う——するような野郎だもの。

まあ、あれは押し掛けて来て刃物を突き付けた取り立て屋も悪い。でもそうさせるような要因を作ったのは彼だし。うん、やっぱりあの人が悪い。

それにしても、寒い。

窓の外を見てみれば、ちらちらと雪が降り始めていた。

頭から被っていた毛布を首元に手繰り寄せる。それでも冷気は侵入してくる。

ここはケチらずにストーブを点けるべきか？ いやしかし。

今月でここもおさらばかもしれないし、できれば無駄な出費は抑えたい。

……いや、これから引越したとしてそう早くに仕事が見つかるものだろうか。必死になって漸く見つけたのが今の針子の仕事なのに、これから転職なんてしたら努力が水の泡になる。

やはり、引越しは当分先になりそうだ。アクマと遭遇したしこの街は出ていきたかったけど、仕方がない。エクソシストが来て壊してくれることを祈ろう。

と、今はストーブをつけるか否かだった。引越しは諦めたけど、どうしようか。

約数分の逡巡の後、私は点けることにした。これで風邪でも引いて、仕事の能率が落ちて、クビにでもなったら本当にまずい。「働かざる者食うべからず」という金言の元となる言葉が聖書にも有るくらいだし。貧しい人間に生きる術は少ない。

よし、座右の銘にしよう。そのうちポスターにでも書いて貼るとしよう。

毛布を引きずりながら、部屋の隅に置いてある薪を五本ほどストーブ内に設置する。マッチを点け、昨日の新聞に火を移してまとめて薪の上に慎重に置いた。

暫くすれば暖かくなるだろう。また安楽椅子に戻って、窓の外を眺

めることにした。

「……………ん？」

温くなった紅茶のカップを揺らしていれば、目の隅の方で何か光った、気がした。

一瞬だったから何かは分からないが、ここからかなり離れた先でだが、何か光っていた。花火大会でもしているんだろうか。いや、こんな寒い深夜にあり得ない。

じゃあ、今の一体？

嫌な予感がして、私は窓を開けて身を乗り出した。寒気が一気に部屋を占領する。薪がもつたいたいとか思いもしたが、今はそれどころではない。

アクマあとの鬼なごこつとこがあつた後なんだ。警戒してしまってもバチは当たらない。

何も見逃さないように五感を研ぎ澄まし、音を発てないために身じろぎを微かにもしないよう心がける。

これで何も無いのならそれで良い。お願いだから、私に罪悪感を与えないでおくれ。

再びの閃光。しかも今度は爆発音まで聞こえるときた。

レベル2との戦闘は私にとって至難極まりない。しかし、あれが私を殺し損ねたアクマなら止めなくては。私を誘き寄せざるが為に、アイツは街を壊しているのかもしれないのだから。

流石の私でも、そんな最悪な行動は看過できない。ああもう、こんな幼稚な方法を使ってまで私を殺したいだなんてあり得ない。こんなことになると分かっていたら、先程の時に是が非でも仕留めていたのに。

舌打ちをひとつ、ロングコートを着て夜の街へと繰り出した。

「おらア！ 出てこいよ糞女あ！」

悲鳴と破壊音を楽しみながら、レベル2のアクマは街の広場で暴れていた。

近隣の住民からしてみれば悪夢以外の何者でもない。一日の疲れを癒すために眠っていたというのに、唐突に哄笑と爆発音が劈いたのだから。

飛び起きて窓の外を見れば、化け物が街灯をへし折ったり出店を破壊しているではないか。パニックを起こさない方がどうかしている。

「怖じ気づいたのかよ、伯爵様もガツカリだぜ？」

苛立ち紛れの挑発に返事を返す者は誰もいない。ここにはアクマの殺意の対象たるルート・ミツシュリンクはいないのだから。

人っ子一人出てこない状況に、アクマの怒りは沸点を突破した。彼がさらなる破壊活動をせんと両腕に力を込めたとき、涼やかな声は雪とともに舞い降りた。

「待ちなさい。時間は余るほどあるんだろう？」

「来たか！ いや、この際誰でも——」

後ろにいる声の主を殺すために振り返ったアクマだったが、衝撃から口を開けたまま呆けてしまう。

確かにそこには人が居た。声質からしてルートで間違いないが、フードを深く被っていて金色の髪しか見えない。それだけならまだしも、かなり息を切らして膝に手をつけている。ゼエゼエと運動不足の中年のように喘ぐ様は憐れみを誘った。

ふざけているのかとしか思えない態度に、アクマは怒りを通り越して呆れてしまったのだ。

「お前、何してんだ？」

「……ちよつと待ってね。まだ苦しいから……よし」

暫く肩を揺らしていたルートだったが、おもむろにアクマを真っ直ぐに見上げた。

案の定フードで顔は見えない。しかし、アクマは先程のルートだと確信した。彼女の忌々しいイノセンスの気配が肌を刺してくるのだ。

少女は若干息が荒いまま、指をビシツとアクマに突きつけた。

「街中での暴力行為なんて言語道断。森以外で暴れちゃダメだ」

「いや、暴れていいのかよ？」

「殺人よりはマシよ。場所を変えるからついてきて」

歌うような、けれど怒りは十全に込めた声調でルートは言い放ち、ややふらつきながらも素早く森の方角へと走り出した。

とても疲労困憊とは思えない速さに、アクマは驚く間も無く慌てて追いかけた。獲物の逃走は許可できない。

冷静な対応を見せているルートも、内心では焦っていた。

彼女とて未成年らしき見た目とはいえ立派な社会人である。ただできえ女性には仕事が少ないと言うのに、遅刻でもしたら即刻クビだ。真冬入りかけの時期に金が尽いてアパートを追い出されでもしたら。何としても、想像し得る限りの最悪の結果だけは回避せねばならなかった。

いつそ徹夜するか、とネガティブな思考に陥りながらもスピードは加速させる。

ルートには唯一普通の人間には負けないものがあつた。

単純な物だが、それは身体能力の高さ。アクマとまともに戦えない少女にはピツタリの武器だった。

とはいえ、約5キロメートルを疾走するのは彼女にとって辛いものだった。素の運動能力が良くても、超人的な体力が無いのでは意味がない。

何より、高いと言えども所詮は人の範疇。エクソシストのような人外じみたものではなかった。

「……ここが良いか」

ルートが漸く立ち止まった場所は、彼女とアクマが対峙した森の中であつた。

先程の戦い——アクマの攻撃を少女が避ける一方的なもので戦いとは言い難いが——の傷跡は生々しく残っており、少女は僅かに顔を歪めた。

「参つたな……レベル2とまともに戦うのは初めてなんだが」

「またこの森か。今度は逃げられないぞ。ミッシユリンク、お前が殺

「されておしまいだ！」

「逃げたら街を荒らされるししないよ。でも君、少し頭が足りてないんじゃない？」

「ああ？」

訝しげにリンゴの首を傾げるアクマに、ルートはフードを外しながら大きくため息を吐いた。

少し窶やつれたような表情で物憂げに目を伏せる様は痛ましい。当然ながら、アクマに少女を思いやる気持ちなんて有りはしないし、良心も存在しない。寧ろ加虐心を煽られる。アクマとはそういう性質なのだ。

少女は半眼でアクマを睥睨し、解説をし始めた。

「街中で暴れたら、ほぼ間違いないで教団に存在が知られる。そうしたら強力なエクソシストと対峙することになるんだ。そのところ分かってやっているの？」

「はっ、そんなことか。俺様は人間を殺すためにいるんだぞ？」

エクソシストも例外じゃない！」

「……そうか。よく分かったよ、君が力の差も知らない愚か者ってことが」

醒めた調子で、コートのポケットから折り畳み式ナイフを取り出す。

ルートの心中は怒りで荒れ狂っていた。己の力量もエクソシストの力量も知らないくせに暴れる。そして自分まで巻き込んでくる。これほど有害な存在は他になく、彼女にとって反吐が出るほど鬱陶しいものである。

教団を見縊ってはいけない。少しの騒動でも彼等は動く。そんなことすら知らない無知で救いようのないアクマに、ルートは腹が立って仕方がなかった。

何より腹立たしいのは、こんな愚図を放置しかけた自身。どういう結果を招くか想像できなかった未熟な己。

ナイフを構え、重心を下ろすルート。殺意に満ち満ちたその視線はおおよそ聖職者らしからぬものであり、寧ろ悪魔の形相に近かった。

連られるようにアクマも好戦的に笑み、鋭く研がれた爪を少女に向けた。

互いに敵意は十分。最早殺し合いは避けられない未来となる。

再戦が始まる——ことはなく、一つの銃声が響きアクマは地に倒れ伏した。

呻き声一つ上げずに爆発し塵となったアクマに、少女は目を見開き後退る。通常の武器でアクマを壊せはしない。ならば今の銃はイノセンスと言うことになる。

エクソシストだと理解したルートは、恥も外聞もかなぐり捨て脱兎の如く駆け出した。

彼女にとってエクソシストはアクマ以上に忌避するものだ。イノセンスの保持が知られれば教団に連れていかれるのは目に見えていた。

それだけは御免だった。エクソシストにだけは、まだなりたくない。死んだ方がマシなのだ。その一心で身体能力を最大限まで活かし、その場から一秒でも早く去ろうとする。

だがそこには、その足を止めるのに充分な声の主がいた。

「久しぶりの再会だったのに随分な反応だな」

ピタリ、と。さつきまでの焦りようが嘘のように間抜けた表情へと変化していく。

だがそれはすぐに輝かんばかりの笑顔に変わっていった。その人物はさつきルートが追思していた、感謝してやまない人でなし。

暖かい微笑みを湛え振り返り、少女はその人物に——

「お久しぶりです、クロスさん！ まだ生きてらっしゃったんですね、とつくに殺されたかと思ってました！」

息をするように毒を吐いた。

「お前は本当に相変わらずだな」

全く堪えた様子のないクロスに、ルートは小さく肩を竦める。

黒の教団の団服を纏い、顔の半分を覆う白い仮面。夜の闇にも呑まれないような真紅の髪のはきは、どう見てもクロス・マリアンその人だった。

ルートは嘆息をわざとらしく吐きながらも、どこか嬉しげにクロスを見つめた。

「だってクロスさん、恨まれるようなことばかりしますし。命狙われない方がどうかしてますよ」

それよりも、と尚も続ける。

今度こそ喜色を隠すことなく、満面の笑みをクロスに向ける。ナイフを畳みポケットに滑り込ませてから、丁寧に礼をした。

「ありがとうございます。お陰で助かりました」

しかしクロスは眉を寄せ、ルートとは逆に厳しい雰囲気へとなりつつあった。

ルートはきよとんと首を捻る。普通礼を言われてそんな顔になるものだろうか。いや、クロスさんは普通じゃないけども。中々に失礼なことを考えつつ、考えうる限りの理由を黙考した。

その必要はなかったようで、すぐにクロスの問いかけにより明白となった。

「まだ、エクソシストになる気はないんだな？」

「あー、うん、ありがとうございます。クロスさんの心配してくれる気持ちは有り難いんですが、なれません」

戸惑いがちに謝ったが、すぐにキツパリと拒否の気持ちさを告げる。

少なくとも、今の状態でなれるわけがないと少女は考えている。イノセンスが弱すぎるし、大した戦力にもならないだろう、ともう一つ理由はあるが、それは意地みたいなものだった。

「それに今のところは良い感じの生活なんです。それを捨てたいとも思えませんしね」

悪戯っぽく苦笑しながら、それでも明るい調子を崩さない少女。

クロスは何か言いたげな顔をしていたが、すぐにふつと微笑み堅苦しい空気を壊した。

「ま、お前がそれで良いなら良いさ。だが、無茶はするなよ」

彼にしては珍しい思い遣り溢れる言葉に、神妙に首肯する。

——何故だろう？ 少し、ホツとしたような目をしている、ような？

何処と無く安堵の色をちらつかせた彼にルートは首を傾げたくなるが、疑念を心の内に留めるに抑えた。賢明とは言い難いが、頭の回転は速いクロスが何も言わないという事は、言う必要がないと言う事なのだろう。それならば、己が無理に聞く必要もない。

そう結びつけ、ルートは自身を納得させてクロスへにこやかに語りかけた。

「とりあえず、森出ませんか？ お茶くらいはお出ししますが」

「悪いが今は急いでるんでな。お前の茶を飲めないのは残念だが、またの機会にしましょう」

すつとルートの目が細くなる。刃物のような鋭さを纏いながら、聞こえるか聞こえないかの声量で尋ねた。

「伯爵さん、ですか？」

「この辺りを彷徨^{うろつ}してるようだ。もし近くに住んでいるなら大人しくしておけ」

「うわ、ホントですか……つい最近来たばかりなのになあ、くそう伯爵さんめ」

あの人さえいなければ……と怨嗟の言葉をぶつぶつと連ねる。それもすぐにガツクリと項垂れることで終わりを告げたが。

落ち込んだ状態も長くは続かず、背筋を伸ばしクロスを見上げる。琥珀色の瞳は真っ直ぐにクロスの隻眼を射通した。ルートは真剣な面持ちで言葉を紡ぐ。

「無理はしないで下さいね。貴方に死なれるのは参ります」

「……お前も気を付けろよ。今回みたいに偶然俺がいるなんてことは滅多にないからな」

ルートは深く頷き、一礼してから入り口とは違う森の出口へと駆け出した。

アクマが破壊されるとき爆発音が響いたのだ。警察や野次馬が来ても可笑しくはないだろう。

深くフードを被りながら目立たないように素早く、騒がしくなってきた街を駆けていく。クロスはそれを、普段の彼では有り得ないような真直な瞳で見つめていた。

今イタリアだった筈。リナリーも今は療養中だから違う。デイシャはオランダ。となると……」

「はい、身長的一致するエクソシストがいません」

何よりも、ドイツでアクマを破壊したという旨の報告が誰からも来ていない。規則の厳しい教団では、報告は必ずする様定められている。それに従わない人物となると元帥の一人、クロス・マリアンが思い浮かぶが、それでは体格が一致しない。

机の上で手を組み、考える素振りを見せるコムイ。全てのエクソシストを把握している辺りが彼らしい。

流石は室長と言うべきか、時間を長く取らずに決断を下す。迅速ながら正確な行動も、彼の長所の一つだった。

「ファインダーにその人物を搜索するように言ってくれ。結果が出次第、次の司令を出す」

「分かりました」

リーバーは力強く頷くとその書類をコムイに渡し、急ぎ足で電話室へと行ってしまった。

コムイはその書類を眺めながら、ラボを出て司令室へと向かう。

この人物一人でも大きく戦局は変わる可能性がある。新たなエクソシストが希望となるのだから。彼はファインダーからの色良い報告を静かに祈った。